



カウンセリング子育て支援センター 2024年度 報告書

IC 茨城キリスト教大学

目 次

1. 本センターでの発達支援の取り組み紹介.....	1
「茨城キリスト教大学カウンセリング子育て支援センターにおける発達支援 ープレイグループ「クローバー」での7年間の取り組みー」	
2. 研究活動紹介.....	7
「茨城キリスト教大学附属認定こども園における，幼児運動指導について」	
3. ブックレビュー.....	9
「石岡丈昇（2024）. エスノグラフィ入門 ちくま新書」	
4. カウンセリング研究室から.....	11
5. 子育て支援室から：子育て支援室「アンネローゼ」主催講座.....	12
6. 日立市との協働事業：市内保育園等への巡回相談支援.....	14



《1》 本センターでの発達支援の取り組み紹介

茨城キリスト教大学カウンセリング子育て支援センターにおける発達支援 ープレイグループ「クローバー」での7年間の取り組みー

中島美那子（文学部児童教育学科 教授）

菅野ひろみ（文学部児童教育学科 兼任講師）

本報告は、本学カウンセリング子育て支援センターで2018年度から始まった親子教室7年間の実践紹介です。

1）本実践の背景

近年わが国では、子どもおよび子育て中の家庭に対する官民両面からの発達支援が充実しつつあり、効果をあげています。このような潮流の中で学内に本センターが設立され、カウンセリングとともに発達支援を標榜する本センターならではの発達支援を、なんとか実施できないかと考えました。

そこで、効果が科学的に実証されているペアレンティング・プログラムを実施できる教員、保育学や教育学そして心理学を学ぶ学部学生・大学院生、本執筆者主催講座の保育（託児）に長年関わってくれた保育士、これらの力を結集してプレイグループ「クローバー」という、関わり方に発達支援の視点を必要とするお子さんとその保護者を対象とした親子教室を始めることとしました。

2）実施の概要

① 開催期間・頻度

- ・ 例年、10月から2月まで計14回
- ・ 週1回（金曜日午前中）、90分間（前後を合わせると約120分）
- ・ 2018年度から2024年度まで7期開催

② 募集方法

- ・ チラシを作成し、配布（公共施設、保育所、幼稚園、認定こども園、子育て支援施設、小児科など）
- ・ 近隣自治体の市報への情報掲載
- ・ 大学Webサイトへの情報掲載
- ・ 市町村保健センターでの保健師などによる対象者への声掛け など

③ 実施場所

茨城キリスト教大学カウンセリング子育て支援センター内の子育て支援施設
「アンネローゼ」

④ 実施内容

- ・ 子どもグループ：就学前の幼児が、大学教員（公認心理師）、保育・初等教育・特別

支援教育を専攻する大学生、心理学研究科大学院生、保育士と共に遊び中心の活動を行います。

- ・保護者グループ：別室で大学教員（公認心理師）と共に「前向き子育てトリプルP*¹」の講座を中心とした学びの時間を持ちます。

* 1 「前向き子育てトリプルP」とは、オーストラリアのクイーンズランド大学M.サンダース教授を中心に開発された親支援プログラム。世界各国で効果が実証されています。

⑤ これまでの参加者の内訳

参加される子どもさんの多くが2歳代から3歳代でした。第5期から7期にかけては、就園した幼児（4歳代）の割合が高くなりました（表1）。

表1 参加者の概要

回	年度	参加児の年齢の幅 (10月開始時点の年月齢)	子どもの 人数	保護者人数
1	2018	2歳2ヶ月～4歳0ヶ月	5名	5名
2	2019	2歳3ヶ月～3歳9ヶ月	9名	9名
3	2020	2歳6ヶ月～3歳1ヶ月	7名	7名
4	2021	2歳9ヶ月～2歳11ヶ月	5名	5名
5	2022	2歳10ヶ月～4歳5ヶ月	6名	8名(父母での参加2組)
6	2023	2歳10ヶ月～4歳1ヶ月	5名	5名
7	2024	2歳1ヶ月～4歳7ヶ月	8名	9名(保護者のみ参加1組)

⑥ 全14回のスケジュール

プレイ（子ども）グループの1日の流れ

*迎え入れも送り出しも、保護者とは入り口でやりとりをします。

- 9：50
- ・入室（タオル、水筒などをカバンから出す、水筒を置く、ネームをつける、靴下を脱いで箱に入れる、タオルをかける、カバンや上着をロッカーに置く等）
 - ・自由遊び
 - ・おもちゃの片付け
 - ・イスを運び着席→お集まり（挨拶、呼名に返事、手遊び、模倣遊び等）
 - ・リトミック
 - ・サーキット運動（トランポリン、平均台、はしご等）
 - ・トイレ（あるいはおむつ交換）
 - ・個別の机上課題（12月上旬くらいから始める）
 - ・手洗い
 - ・おやつ
 - ・絵本の読み聞かせ、帰りの挨拶
 - ・退室のための準備（靴下を履く、ネームを取る、荷物をバックに入れる、上着を着る等）
 - ・退室後、保護者と合流
- 12：00
- ・学生や大学院生から保護者へ活動の報告、交流のひととき



図1 個別の机上課題の様子



図2 各自のタオルかけ

保護者グループの年間の流れ

(全14回)

約10回：前向き子育てトリプルPに基づき、学習

約2回：早い時期と後半の時期に、子どもグループの活動を録画したものを視聴。教員が解説しながら、保護者は子どもの行動について理解を深める

約1回：「発達の凸凹」について、その特性について学ぶ

約1回：我が子に合う園選びのポイント等についてディスカッション

(これら14回の内容を、その時の状況によって組み立てます)

⑦ スタッフ会議

毎回実施の前におよそ30分、実施後に60分から90分程度のカンファレンス（確認・振り返り）の時間をもちます。メンバーは教員、保育士、学部学生、大学院生です。

・事前スタッフカンファレンス

事前カンファレンス時間：約30分（9：15～9：45）

報告内容：大学院生が作成した前回のセッション記録（図3）をもとに、セッションの振り返り、引き継ぎ事項の確認など

・事後スタッフカンファレンス

事後カンファレンス時間：約60分から90分（12：00～13：30）

報告内容：その日の子ども一人ひとりの様子の報告と今後の関わり方の検討。子どもグループ施行の検討（環境の改善やその他検討事項）。保護者グループの報告（大まかな流れの報告等）

[illegible]

図3 スタッフ会議用セッション記録

⑧ 修了後の取組み

- ・14回修了後に作成した所見は、保護者に希望の有無を確認後、それぞれの就園先や当該地域の保健センター（執筆者が連携できる保健センター）と共有
- ・縦と横のつながりを継続する目的で、毎年保護者の同窓会を開催（年2回）



図4 朝のスタッフ打ち合せ

⑨ 効果の検証方法^{*2}

開催前・後に保護者にはアンケート（SDQ、ペアレンティングスケール、感覚プロファイル）に回答をお願いし、子どもには発達検査（新版K式発達検査2001あるいは2020）を実施します。

本検査は、効果の検証のみならず所見（発達評価報告書）を作成し、保護者の子ども理解の一助となるようにしています。

*2 本プログラムは研究機関での実施であることから、保護者の方々から同意を得て、発達支援研究としてご協力いただいています（協力は任意としています）。

2023 年度

プレイグループ「クローバー」

プレイグループ「クローバー」は...

「子育てが大変！」と感じている保護者の方、
お子さんの発達に気になっている
保護者の方向けの親子教室です。
本学教員、保育士、学生が、
お子さんの発達を促す活動に取り組みます。

いつ？ 10月～2月の金曜日
10:00-12:00 (全14回)
このほかに個別の発達確認の時間が
2回あります。(約30分～80分)

どこで？ 茨城キリスト教大学
子育て支援施設「アンネローゼ」
お子さんたちは、グループでの活動や
一人ひとりに合わせた内容で活動を行います。

その他、詳しいことは裏面をご覧ください

申し込み・問い合わせ
IC 茨城キリスト教大学 カウンセリング子育て支援センター
TEL: 0294-52-3215(代表)
〒319-1295 日立市大みか町8-11-1 JR常磐線大塚駅西口(学医口)隣接
※お問い合わせは平日9:00～16:30ですが、担当者不在のことがありますのでご了承ください。

2023 年度 プレイグループ「クローバー」

日時 10月～2月の金曜日 10:00～12:00 (全14回*)
*14回の前後に発達確認の個別の時間があります(約30～80分)。

回	月 日	内 容	スタッフ
前	個別に設定	発達の状況確認	大学教員
1	10/13	プレイグループ(子ども)と保護者グループに分かれて活動します。	【プレイグループ】 大学教員・心理士・ 保育士・学生
2	10/20		
3	10/27		
4	11/10		
5	11/17	【プレイグループ(子ども)】 お子さんたちは1人ひとりに合わせた発達を うながす集団および個別活動を行います。	【プレイグループ】 大学教員・心理士・ 保育士・学生
6	11/24		
7	12/1		
8	12/8		
9	12/15	【保護者グループ】 保護者の方は、別室で子どもの発達や子ども との関わり方について学びます。ペアレン ディング・プログラム「前向き子育てトリ プルP」を用います。 知識を得るだけでなく、仲間づくりのための 場でもあります。	【保護者グループ】 大学教員
10	12/22		
11	1/19		
12	1/26		
13	2/9		
14	2/16		
後	個別に設定	発達の状況確認	大学教員

場 所 茨城キリスト教大学 子育て支援施設「アンネローゼ」

対象児 2歳以上4歳くらいまで(8組限定)

料 金 講座 14回 14,000円(1回あたり1,000円)
個別の発達確認2回 4,000円(1回あたり2,000円)
テキスト代 3,000円
毎月最初の講座日に当月分を徴収します。途中お休みの講座はできません。

申込方法 anne@icc.ac.jpへ、メールでお申し込みください。

件名:「クローバー希望」
本文:下記の内容を記載してください。
①保護者氏名(ふりがな) ②住所 ③電話番号 ④メールアドレス
⑤お子さんの名前【ふりがな、性別、生年月日】
※記載された個人情報は、本講座に関係することのみに使用します。

※研究機関(大学)の事業のため、研究へのご協力をお願いする場合があります。ただし、強制ではありません。

図5 2023年度の募集チラシ(表裏)

3) 7年間の実践から見えてきたこと

現在2024年度末になり、気づいた時には第7期が修了していました。あっという間の7年でしたが、その間、コロナウィルスの蔓延により14回全てを対面で実施することができずに、何回かをオンラインでの実施に変更せざるを得なかった年もありました。しかしそのような中でも、画面を通して学生らが子どもたちに対して手遊びや読み聞かせを行い、普段は経験できない実際の保護者の話し合いの場面に立ち会うという経験ができたことが、学生らの非常に良い刺激になったという想定外のプラス面を生み出したりもしました。

さて、本実践は子どもへの発達支援を主な目的としてスタートしました。そのため、「クローバー」への参加前と参加後に質問紙や発達検査を行っていることから、子どもさんへの効果は質的にも量的にも蓄積されつつあります。

そのような中で、子どもさんの成長と同様に着目したいのが保護者の方々の変化、学生・大学院生の成長です。そこで以下は、特に保護者への本実践の意義、そして学生にとっての本実践の意義という2つの視点に絞って7年間の取り組みで見えてきたことについて触れたいと思います。

① 保護者の子ども理解の促進

会のはじめに私たち執筆者から子どもさんの発達状況に関する報告書を渡された保護者の方々は、わが子の発達を客観的に捉える手がかりを得ることとなります。その後は約半年をかけて「前向き子育てトリプルP」の内容を主として、子どもの発達に合わせた適切な関わり方について学び、日常生活の中で実践していきます。このことから、多くの保護者の方が徐々にわが子の言動を客観的に捉えたり理解を深めたりするようになっていきます。

② 保護者のストレスの軽減と自己受容感の高まり

保護者グループは単に子育ての技法を学ぶだけではありません。保護者グループを担当する本執筆者の一人は、互いの心理的安全性が醸成され、横のつながりができるよう心がけて毎回進行しています。そのこともあり保護者の方の多くは徐々に安心感を増し、自己受容感を高めてくださっているようです。

③ 学部生、大学院生の発達支援の実践的学びの深まり

本事業内では、学生もスタッフの一員として参加しています。また執筆者らは、開始前や後のカンファレンスで学生の発言（見立て）を十分に引き出すことに努めています。このことも手伝って、次第に学生の多くが主体的に関わる姿勢へと変化する様子が見られます。



図6 サーキット運動の様子



図7 個別の机上課題の様子

④ 模擬的な包括支援チームの結成

スタッフとして参加する学部生は教員養成および保育者養成コースに所属し、大学院生らは心理職を目指す者たちです。

このことから学生は将来の教職、保育職、心理職の視点を備えたチームとなり、模擬的な包括支援チームを経験することができています。

4) さいごに

以上がプレイグループ「クローバー」の7年間の取り組みの報告です。今後も地域の発達支援に少しでも貢献できるよう、保育スタッフ、学部学生、大学院生とともに取り組みを継続していきたいと思っています。

《2》 研究活動紹介

茨城キリスト教大学附属認定こども園における、幼児運動指導について

天野 秀哉（文学部児童教育学科 准教授）

本報告は、2024年度の本学附属認定こども園に在籍する子どもたちへ実施をした、運動指導の活動紹介になります。2021年より、認定こども園からの要望を受けて、こども園と大学の連携事業の一環として、年2回程度実施をしています。

1) 本活動の実施背景について

2020年度に実施した、児童教育学科・幼児保育専攻と大学附属認定こども園の連絡協議会において、こども園側から、子どもたちの運動場面の低下を鑑み、大学と連携して運動指導を中心とした活動を実施したいというお話をいただきました。

こども園としては、①子どもたちが多くの運動量を確保できるような、園では実施できない広いスペースでの活動がしたい。②園内で実施できる運動活動の参考にしたい。③子どもたちの運動能力のある程度の把握と変化を知っていきたい。といった内容のリクエストがあり、これらをなるべく満たすような活動を、大学側として、筆者が提案と実施をしていくこととなりました。

2) 2024年度の実施内容

本年度は、みらい園とせいじ園に在籍する年中児を対象として、2024年6月24日と2025年2月19日に全2回実施をしました。各回、両園ともに、2クラスずつの計4クラス（1クラス約20名×4回）を、1クラス約40分ずつで実施しました。

【6月実施内容】 バランスボール運動、パラバルーン、まねっこ移動運動

【2月実施内容】 バランスボール運動、体操サーキット遊び



バランスボール運動は、初年度より必ず実施している内容になります。45cmのジムニクボールを用いて、「乗る」「弾む」「転がる」運動を実施しました。園内に道具がなく、子どもたちが今までにあまり経験していない運動であり、初めて実施するような動きを中心に、遊び感覚で楽しく取り組みながら、総合的な体力向上を図ることができる運動になります。また、6月と2月に実施し、できるようになった

動きの確認をすることで、子どもたちの全身の筋力やバランス、動きを持続する能力などの発達状況を確認できるようにしています。

パラバルーン・まねっこ移動運動は、道具を用意する必要がない、もしくは園でも道具があり今後も園内で実施可能な運動を、園側のスタッフに提供する目的で実施しました。パラバルーンは、園内で実施する際の注意点や運動目的に応じたやり方の提示をしています。まねっこ移動運動は、一定の距離を、課題の動物や乗り物などの動きを真似て移動する運動です。ゾウやゴリラといった動物や、飛行機や新幹線といった乗り物になりきって

走りきることで、基本的な動き（身体を移動）を体験します。体を動かす遊びや日常生活の中でこれらの動きを経験することで、易しい動きから難しい動きへ、一つの動きから類似した動きへと、動きのレパートリーやバリエーションが拡大し、多様な動きを獲得していくための運動内容の提供を目的としています。

2月に実施した体操サーキット遊びは、いくつかの運動を実施するステーションを体育館内に設け、子どもたちが順にそれらのステーションをめぐるように内容を実施しました。実施した運動は、「ケンケンパ」「かごへのボール投げ」「肋木よこわたり」「ラダー or ミニハードルのジャンプ移動」「マットでの回転 or 跳び箱の上からジャンプ」「鉄棒でのぶら下がり」です。子どもたちは、これらを順に2回実施した後、好きな場所で自由に遊びました。



この運動の目的は、子どもたちが経験している運動パターンを把握することと、好きな運動、苦手な運動を見えるようにし、園側のスタッフに把握してもらうこととしています。特に園側のスタッフには、子どもたちが一通り各種の運動を経験した後の、自由に遊ぶ際にどの場所に行き遊ぶかを観察してもらいました。

3) 実施内容から見えてきたこと

バランスボール運動は、6月と比較して2月実施回では、多くの子どもたちがボールの上で座って弾んだり、乗って転がったりする運動ができるようになっていました。特別この期間に、バランスボールを用いた運動をしていたわけではないですが、動きの多様化にともなった、子どもたちの運動能力の発達を確認することができたと思います。できれば今後、園でもこのボールを採用して、普段から手に入る環境を整えられると、子どもたちの遊び感覚で楽しく取り組みながら、総合的な体力向上を図っていけるのではないかと考えています。

体操サーキット遊びでは、子どもたちが自由に遊ぶ際に、ケンケンパやラダー・ミニハードルといった運動は、どちらの園の子どもたちもほとんど集まらず、実施していない状況になりました。せいじ園の子どもたちは肋木に多くの子どもが集まり、みらい園の子どもたちは肋木にはほとんど集まりませんでした。これは、普段から経験している運動、もしくは得意な運動に子どもたちが向かったためだと考えられ、両園ともに、ケンケンパやジャンプ移動といった運動を普段の遊びの中で取り入れていなかったことが考えられます。また、せいじ園にはクライミングウォールが設置してあるため、肋木がなじみのある運動と捉えられていたようです。このような子どもたちが経験している運動パターンを把握することや、好きな運動、苦手な運動を見えるようにできたことは、園での運動遊びを考えていく上で貴重な機会になったと思います。

今後は、園児の体力状況を把握する取り組みも実施したいと考えています。

《3》ブックレビュー

石岡 丈昇 (2024). エスノグラフィ入門 ちくま新書 (税込1,056円)

岩崎 眞和 (生活科学部心理福祉学科 准教授)

本報告は、私の卒業研究指導（ゼミ指導）の現在地を兼ねた文献紹介である。ここ数年、何かしらのテーマに即した新書または文庫のテキストを軸にゼミを展開してきた。新書や文庫にこだわったのは、通学時にもスマホサイズで持ち運びが容易で読みやすく、安価で輪読もしやすいためであった。本稿で紹介する文献（以下、本著）には、そのテキスト選定とゼミ指導の試行錯誤プロセスで出会った。

本学での卒業研究指導に携わるなかで、私のゼミ生たちが創り上げていく卒業研究のテーマ設定と研究方法に一定の傾向があることに気づいた。まずテーマとしては、「青年期」の「臨床心理学的」な概念や主題へと収束することが多い。これは、ゼミ生たちが的確に指導教員の研究領域を捉えているためであろう。興味深いのは、その探求に向けて学生たちが採用する研究方法であった。例年、多い年には2-3名ほどの学生たちが、必ずといってよいほどあるタイプの卒業研究を執筆・提出し続けていた。

それは、大学生活（またはそれ以前）のほとんどの期間に亘って携わったり、所属していた“フィールド”や“場所”（例：バイト先、学校ボランティア等）での実践的・体験的理解を“当事者（あるいは実践する立場）”と“観察者（あるいは俯瞰する立場）”の両スタンスから描くというタイプの卒業研究である。たとえば、“感情労働”の観点から飲食店での約3年半（コロナ禍含む）にわたるホール業務のアルバイト体験をまとめた卒業論文『感情労働としての接客とおもてなしの心理学』（2022年度提出）では、さまざまな人々に対する“おもてなし”の工夫とその根拠が臨床心理学的視点から緻密に考察されていた。しかし、彼らの探求心と実践力を昇華できるだけの卒業研究指導を十分に行えていないのではないかという指導力不足への懸念や不安があった。

前置きが長くなったが、質的研究に不慣れでよくわからないながらも、どうやらこうしたタイプの研究が“エスノグラフィ (ethnography)”、厳密には文化や社会全体といった大きな単位ではない、より小さな単位のフィールドを描く“マイクロエスノグラフィ (micro-ethnography)”に位置付けられるのではないかと思い至り、少しずつ勉強を始めた。エスノグラフィ (ethnography) とは、20世紀初頭のトロブリアント諸島でのフィールドワークを基に『西太平洋の遠洋航海者』を著した文化人類学者ブロニスワフ・マリノフスキ (1884-1942) によって確立され、現在まで発展してきた質的研究法の一つである。エスノグラフィは、人々に共有される振舞いや考え方のパターンとしての文化を現地の人々（所属集団内の人々）の視点から描くための研究方法であり、近年、臨床心理学でも注目・応用されている研究手法である。“個”の記述と探求に重きを置く事例研究と比べて、複数の“個”が所属、形成する文化や集団、場に通底する構造的なパターンを描き出すという特徴を持つエスノグラフィは、“集団（や場）”の記述と探求に適した手

法といえよう。こうしたエスノグラフィの特徴を、著者の石岡は「生活をまるごと理解する方法」と述べている。すなわち、「生活を書く」研究の手法であり、書き手は必然的にその集団生活を生きる（またはかつて生きたことのある）フィールドワーカーである。最近では“臨床エスノグラフィ”という言葉もよく耳にするが、非専門家の学生という立場ではあっても、特定の集団やフィールドに所属するゼミ生（当事者）が“内側”から書いた卒業研究は、まさに臨床エスノグラフィであった。

「エスノグラフィは、経験科学の中でもフィールド科学に収まるものであり、なかでも①**不可量のもの**に注目し記述するアプローチである。不可量のものの記述とは、具体的には②**生活を書く**ことによって進められる。そして生活を書くために調査者は、フィールドで流れている③**時間に参加する**ことが必要になる。こうしておこなわれたフィールド調査は、関連文献を④**対比的に読む**ことで着眼点が定まっていく。そうしてできあがった⑤**事例の記述を通して**、特定の主題（「貧困」「身体」など）についての洗練された説明へと結実させる。」（石岡、2024：p.25 & 265）

本著の結論は、上述の引用箇所を集約されている。そして、本著はこの結論を十分に腑に落ちて理解できるような重層的章立てになっている。加えて、①著者自身がこの研究手法を体得していく試行錯誤プロセスを追体験できる、②講義録をベースとしているため文章が平易である、③過去に大学教員としてご指導された6本の卒業論文の作成過程の概要がコラム化されている、④強調点が太字になっており、基本的に太字を追うだけでも本著のコアメッセージを理解しやすいなどの特徴もあり、読後には先の引用箇所の理解が確実に進展する。「あとがき」には読書案内の形でエスノグラフィに関する名著がその概要とともにリスト化されており、新書のお手本のような良著である。本著の「はじめに」の全文を、以下のリンクから試し読みできるためご一読いただきたい。

<https://www.webchikuma.jp/articles/-/3633>

保育臨床や心理臨床および社会福祉学等に本研究手法を取り入れることは間違いなく有効であり、本著はその補助線になると思い共有させていただいた。最後に、ゼミや卒業研究を創り上げていく過程で、日々の暮らしや大学生活に埋もれて見えにくい多くの気づきと新たな視点を教えてくれた既卒・現役の学生さんたちに感謝したい。私のコメントは、ときに的外れなものもあったと思うが、彼らに共通する驚異的な筆の早さと瑞々しい感性、熱意でリカバリーしながら、締め切りまでに提出してくれた卒業生さんたち、本当にありがとうございました。



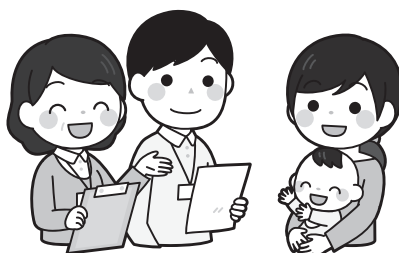
《 4 カウンセリング研究室から

櫻井由美子（生活科学部心理福祉学科 教授）

カウンセリング研究室（以下、力研）は、2018年にカウンセリング研究所がカウンセリング子育て支援センターの下位組織として位置づけられて以来、学生教育の場としての特色をあわせもちながら、相談業務を展開してきました。2024年度には、心理福祉学科と児童教育学科の教員6名、心理相談員3名、そして大学院生7名が選任カウンセラーとして心理臨床業務に携わりました。

一般的に、心理的な悩みや不調についての相談先としては、その内容に応じて、病院の精神科や心療内科、保健所や児童相談所、県の精神保健福祉センター、教育相談関連機関、学校や職場内の相談室などの選択肢があります。これらに加えて、各種法人や個人経営のカウンセリング機関も存在します。力研は後者に位置づけられます。こうした特色が影響しているのか、力研に寄せられる相談内容は多岐にわたり、クライアントの年齢層もさまざまです。また、カウンセリング子育て支援センターの一部門であるためか、子育て関連の相談も多く寄せられています。地域他機関からの紹介を受けて来室されるクライアントも多く、本学卒業生の紹介によって力研に辿り着くクライアントも少なくありません。

このような地域の皆さまの多様なニーズに応えるために、スタッフ一同、力研の伝統である「クライアント中心」の支援実現をめざし、心理専門職としての自己研鑽を続けながら、相談業務に取り組んでいます。また、大学院生は、そうした姿勢を身につけるために日々研鑽に励んでいます。



《5》 子育て支援室から：子育て支援室「アンネローゼ」主催講座

◎子育て支援室「アンネローゼ」主催講座

① 完璧な親なんていない(NP)プログラム

日時：2024年6月7日(金)～6月28日(金)

午前10時～12時 全4回

担当：萱場 晶子 (NPNC認定ファシリテーター・児童指導員)

ファシリテーターのもとでお子さんと離れて、子育てについてゆっくり語り合います。



② ワーキングマザー & ファザー準備講座

日時・担当：

2024年11月6日(水) 萱場 晶子

(NPNC認定ファシリテーター・児童指導員)

11月13日(水) 村田 孝二

(NPO法人学修デザイナー協会前理事長)

11月20日(水) (同上)

11月27日(水) 高村 浩子

(ファイナンシャルプランナー)

午前10時～12時 全4回

講師や参加者と共に、将来や家計について考えます。



③ スター・ペアレンティング・プログラム

日時：2024年12月16日(月)

～2025年1月27日(月)

午前10時～12時 全4回

担当：中島美那子 (児童教育学科教員)

親としてぶつかる問題の様々な解決方法について考えます。



④ プレイグループ「クローバー」

日時：2024年10月11日(金)

～2025年2月7日(金)

午前10時～12時 全14回/発達検査2回

担当：中島 美那子(児童教育学科教員)

菅野 ひろみ (本学兼任講師)

お子さんの発達が気になっている保護者の方向けの親子教室です。



⑤ クローバー Teen

日時：2024年6月15日(土)

～2025年2月8日(土)

午前10時～12時 全6回

担当：中島美那子 (児童教育学科教員)

菅野ひろみ (本学兼任講師)

子どもグループには、学校でも家庭でもない「第3の居場所」の提供を、保護者グループには、何でも話せる安心の場所を提供します。

◎地域・国際交流センターとの共催講座

⑥ 夏休み子どもアンネローゼ

日時・担当：

2024年8月6日(火)

中山 健一（文化交流学科教員）

8月7日(水)

小西 優子（食物健康科学学科教員）

8月8日(木)

穂積 訓（児童教育学科教員）

8月9日(金)

佃 彰一郎（児童教育学科教員）

午前9時30分～午後12時 全4回

日替わりのテーマを通して、大学教員、保育士、学生と一緒に時間を過ごす、小学生向けの講座です。



⑦ アンネローゼひろば

日時・担当：

2024年5月28日(火)

原口なおみ（児童教育学科教員）

『声をとどける～親子で楽しむわらべうた・えほんのせかい』

6月11日(火)

江尻 桂子（児童教育学科教員）

『みんなで考える「これからの子育て」』

6月25日(火)

中島美那子（児童教育学科教員）

『乳幼児からはじめる性の教育』

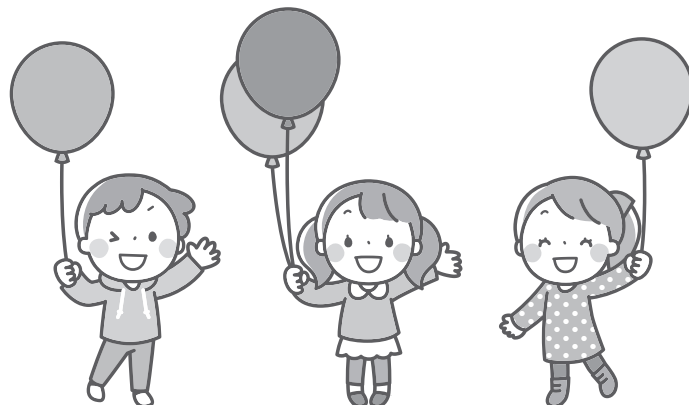
7月9日(火)

天野 秀哉（児童教育学科教員）

『身体メンテナンスー自宅でもできる体づくりー』

午前10時～12時 全4回

それぞれの大学教員の専門をもとに、テーマに沿っておしゃべりします。



《 6 》 日 立 市 と の 協 働 事 業 ： 市 内 保 育 園 等 へ の 巡 回 相 談 支 援

日 立 市 巡 回 支 援 専 門 員 整 備 事 業

2024年度実績

1. 巡回支援園 14園

(内訳)

認定こども園 3園

保育所 11園

幼稚園 0園

2. 巡回支援回数 のべ42回

3. 巡回支援教員

文学部 児童教育学科

・菅野ひろみ

・久保 愛恵

・斎藤遼太郎

・椎木 久夫

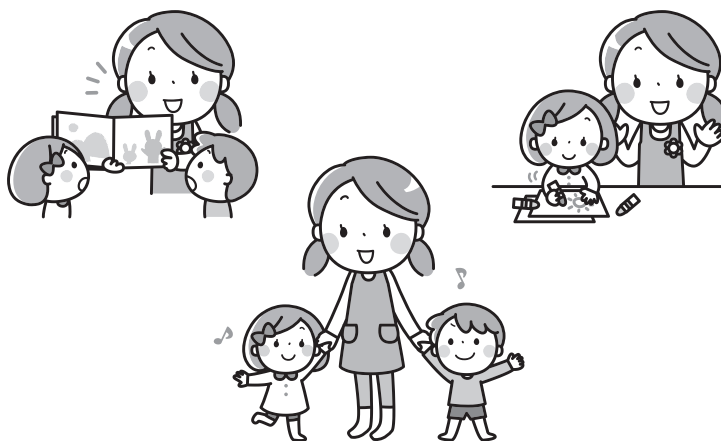
・照山久美子

・飛田 隆

・中島美那子

生活科学部 心理福祉学科

・望月 珠美



茨城キリスト教大学
カウンセリング子育て支援センター
2024年度報告書

2025年3月発行

編集発行

茨城キリスト教大学
カウンセリング子育て支援センター
所在地 〒319-1295
茨城県日立市大みか町 6-11-1
電 話 0294-52-3215 (代表)
U R L <https://www.icc.ac.jp/>

印 刷

いばらき印刷株式会社
住 所 〒319-1112
茨城県那珂郡東海村村松字平原 3115-3
電 話 029-282-0370
F A X 029-282-0524

